

## 講演会を終えて 担当者のミニコラム

江戸時代中期の儒者荻生徂徠（おぎゅうそらい）は古文辞学の立場から、中国古代思想の研究や詩文の制作に取り組み、江戸に漢詩を流行させました。塾を開いて後進を育成し、ここで学んだ、岸和田藩士府川家に生まれた菅甘谷（かんかんこく）は、大坂で初めて徂徠学を伝えた学者となりました。その流れは香川出身の藤川東園へと繋がり、ここで学んだ高松出身の中山城山の塾で、同郷の相馬九方も学びます。中山城山の盟友で漢学者の春田横塘（はるたおうとう）も岸和田の人で、晩年の岸和田藩の藩校に出講していました。この人の勧めにより、香川から相馬九方と藤沢東暎（ふじさわとうがい）が来阪しました。

相馬九方は、このころ知り合った蘭医の新宮涼庭（しんぐうりょうてい）の推挙により、岸和田藩の藩校「講習館」の館長になり、多くの人材を育てました。藩政にも関与したため、「お家騒動」に巻き込まれ、一時は投獄の憂き目にあいます。吉田松陰が岸和田を訪れた際に徹夜で議論を交わしたことがありました。他に人を訪ねる用があって同道した際の偶然の出会いだったようです。

藩校「講習館」では、岸和田藩士の長男である土屋鳳洲が学び、後に相馬九方の婿養子となり、後を受けて教授になります。維新後は校長や教授を歴任し、堺で塾を開きます。ここでは、チベット交流の先鞭をつけた、河口慧海（かわぐちえかい）が学びました。土屋鳳洲は多くの漢詩文を残し出版物も多岐にわたり、岸和田城址碑も手掛けています。

他にも多くの影響を受けあった学者について貴重な話を伺いました。一人一人の関わり合いが興味深く、アンケートにはもっと話を聞きたかったとの意見が寄せられました。

このようにして「引き継がれていく学問」を知り、学者たちが先人に学び同世代で切磋琢磨する姿を垣間見て、学びとは楽しみであったのだと改めて思いました。

図書館は、学ぶ楽しみを知る場所でもあります。これからの郷土展示や講演会がその一助になるよう今後も企画、開催をまいります。